

この人にきく

現代美術家

中村元風氏



(なかむら がんふう)

1955年 石川県に生まれる。1981年 金沢大学大学院理学研究科生物学専攻修了。1986年より釉薬を中心とした光と色の研究を開始する。1995年 日本工芸会正会員に推挙。2002年 加賀市文化財保護審議会委員に就任。2004年から2016年まで中国景德鎮国際陶磁博覧会に出展。2008年、2009年には銀賞、2010年には金賞を受賞。2010年 中国江西省景德鎮(於 景德鎮陶磁学院)にて日本人初となる個展を開催。同年、上海美術館にて外国人陶芸家初となる個展を開催。2011年 世界初となるガラス質の深紅釉「希赤(きせき)」を完成。2014年 水の輝きを永遠化する釉「グレイズ」を完成。2015年 九谷焼開祖前田利治公顕彰碑を建立委員会委員長として建立。2019年 自ら創り出した宝石と貴金属を融合させた「オーロラ」シリーズを発表。2020年 創作活動40周年を迎える。

—まず、先生は大学時代に生物学、そして大学院時代には生態学の研究に従事されていたそうですが、そこから現代美術を志すきっかけをお伺いできますでしょうか。

私は石川県能登の漁村に生まれ育ちました。父は海外航路の船乗り、母は小学校教師で、決して芸術に縁が深かったとは言えません。ただ、幼いころから絵が好きでしたし、何より生き物に興味がありました。僧侶だった祖父に、生命とは、天国や地獄とはなどと良く質問したことを思い出します。13歳の時、船の事故により父親が亡くなりました。太平洋の真ん中で起きた事故だったために、父は水葬という形で海に沈められ、結局手元に戻ってきたのは遺髪と爪だけでした。もともと一緒に過ごす時間が少なかったこともあり、亡くなった実感が全くわかりませんでした。まだ生きているんじゃないか、そもそも生きるとはどういうことなのか、そんな思いが反芻し、生命についての問いは深まるばかりでした。

このような思春期を経て、大学では生物学を学び、大学院にも進学しました。私の専門は個体群生態学といい、生物の個体数を数え、数学的に解析しその増減を予測する学問です。生命の本質を探究したいとの思いで進んだ道でしたが、実際の研究は生命をモノとして扱うような面があり、理想との食い違いに思い悩むことになりました。

そんな折、目の当たりにしたのが、九谷焼の作家で、動物や植物を生き生きと描く義祖父(中村翠恒)の姿でした。その瞬間、自分が目指していた生物学、生命の探求は、むしろ芸術の中にあると直感したのです。これが現代美術を志したきっかけです。

—元々は九谷焼の陶芸家から入ったということですね。

そうです。義祖父の仕事を引き継ぐ形で、キャリアをスタートしました。陶芸家を名乗っていた時代が長かったので、現在でもそのようにみられることがあります。しかし、当初から生命

の表現をする素材として陶磁に可能性を感じていたというのが正直なところです。ただ、その当時(1980年頃)は、現代美術という言葉がそれほど一般的ではなかった時代で、自分自身もあまり自覚的ではありませんでした。活動を続ける中で、位置づけが徐々に明確になっていきました。

—今でも九谷焼という伝統工芸に関わりつつも現代美術を追求されておりますが、伝統工芸と現代美術の共通点と、また相違点があれば教えてください。

決定的な相違点のひとつは、過去との付き合い方、とらえ方の違いです。伝統工芸は基本的に過去を肯定するところからはじまる。一方の現代美術は過去の否定からスタートします。具体的にいえば、伝統工芸は産地の元祖などを敬い、その再現や継承という形でいかに近づくかを考える。そして、備前なら備前の土というように元々ある素材や技術、産地を大切にします。一方、現代美術は過去のたとえばミケランジェロやダ・ヴィンチや、現代ではピカソなどの先人たちをいかに超えて、新たなものを生み出すかを考える。また、現代美術では自身のコンセプトや表現が中心にあり、素材や技術は手段ととらえるため、誰が制作したかが重要で、産地などにはこだわらない。この立場は、素材や技術、産地を出発点とする伝統工芸とは真逆です。私自身は、世界で一番いい素材や技術を使って作品を制作したいと思っています。だから、世界中を見わたして、最良なものを探し続けています。

もうひとつ相違点を挙げれば、概ね伝統工芸は、用と美を大切に、多くは調度として作られている。すでにある環境の中にいかに合うか、道具としていかに使いやすいかを考える。これは人間が上に立ち、作品が下だという認識があるように私には感じられます。現代美術は、人の心がいかに働きかけるかが勝負。ある環境になじむのではなく、その環境をどのように変えるかに焦点がある。人と作品が対等に向き合わざるを得ない状態を目指していると考えます。

—関係性のレベルが違うということでしょうか。

そうですね。人と作品との関係性という点で、大きく異なると思います。

次に共通点についてです。現代美術の新しさに対して、伝統工芸は古いものだととらえがちです。しかし、それが生まれた当初に思いをめぐらしてみると、実は当時の前衛そのものです。時代を大きく変えるほどの変革をもたらしたがゆえに、何百年以上にわたり価値を保ち続けているのが伝統工芸や古典と呼ばれているものの本質です。その前衛精神といえるものを今に引き継ぐならば、現代美術にたどりつきます。先人たちの精神を現代によみがえらせることは、私自身がまさに意識していることですが、これが本来あるべき伝統工芸の姿だと思います。この立場からすれば、伝統工芸と現代美術は共通したところがあります。

もうひとつ、これは伝統工芸や現代美術に限りませんが、あらゆる仕事は人を元気にする、幸せにするために存在するというのが私の持論です。両者ともに人に資するために作られている。これも共通点ではないでしょうか。

—先ほどのお話のとおり、先生は作品の中に自然や生命を表現されており、素材の多くにセラミックスを用いられています。なぜセラミックスを表現の材料として選択されているのでしょうか。

自分が生物学者だったことが大きく影響しています。最初の生命はいかにして誕生したのか。諸説あるものの、水と鉱物、空気という3つの存在が決定的に重要であり、これらが生命を生じさせたことは間違いありません。地球には岩石などの鉱物があり、水があり、空気があり、これらが混ざり合った中に、雷の電気や、火山の地熱、宇宙線もあるかと思いますが、いろんなエネルギーが加わることで、ある時、化学進化が起こって生命が誕生した。この生命誕生のプロセスは、セラミックスを生成するそれと同じだと気づいたのです。約40億年前に、地球が生命を育んだプロセスを、当時と同じ素材、同じ方法によって作品を生み出すことで、現代という時代にもう一度生命を誕生させる。これが私のやっていることです。だから私の作品は新たな生命体であり、我々生命とは何者なのかという問いかけでもあります。

—合点のいくお話ですね。確かに生命とセラミックスのプロセスは非常に似ています。

両者のプロセスが同じであることは、いわれてみれば納得できると思います。しかし、このことを自覚的にとらえて作品制作しているアーティストはほかに知りません。

生命の定義について、さまざまな人がさまざまな主張をしています。ひとつは細胞膜という膜を形成し、自分を外界から独立させる存在が生命です。この膜を通じてさまざまな物質を代謝という形で出し入れする。もうひとつは、存在が増殖していく、分裂を繰り返し増えていく。それが生命だとい

われている。

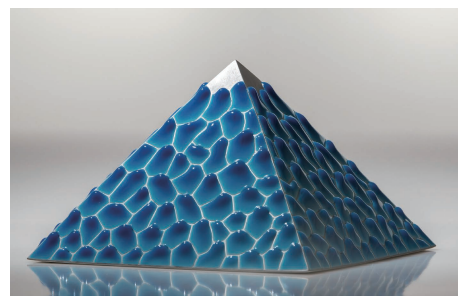
アメーバなど単細胞が生命の原始的な形ですが、実際の作品制作では、それにならない、あらゆる原材料を使いながら、調合や焼成の仕方などさまざまな要素をコントロールし、作品を誕生させます。そのうち作品が動き出すんじゃないかと夢見ることもあります(笑)。

私はどちらかというと違いよりも普遍的なものに着目するタイプです。たとえば芸術のジャンルには油絵、日本画、アクリル画、漆芸、陶芸などがあり別物だと認識されていますが、よくよく考えてみると使われている色材は顔料が大きく関わっていて、その多くがセラミックスですよ。定着の仕方こそ異なるものの、実はどれも同じだととらえることができます。一方、改めて違いに目を転ずれば、セラミックスの優位性が見えてくる。油絵は有機物であるキャンバスに、有機物である油で定着させる。日本画は有機物である紙に、有機物である膠で定着させる。漆芸は有機物である木に、有機物である漆で定着させる。一方の陶芸は、無機物であるセラミックスの支持体に、セラミックスで定着させる。だからこそ、経年劣化が少なく永続性が備わった優れた素材だといえます。

話は少し変わりますが、セラミックスの中でも釉薬は、非常にみずみずしく、透明で生命感を感じさせるものです。油絵には600年ほど前に生み出されたグレイズ技法というものがあります。より透明な輝きを表現するために白いベースを塗り薄く色を重ねていく技法ですが、問題はグレイズという言葉です。釉薬という意味ですよ。つまり釉薬の輝きを理想としてこの技法は生み出された。それほど釉薬の輝きは絵画の世界で憧れだったということです。ところが、本家である釉薬の世界はどうかというと、輝きが当然視されたのか、伝統的な釉薬が今でも中心となっている。まだまだ新たな可能性があるにもかかわらず、歴史的に追求が不十分だと感じています。

—水の輝きを表現した「グレイズ」を発表されていますね。水がそこにあるようなみずみずしさとともに重力に逆らうような力強さも感じます。

水滴に光が差し込んだ際に、みずみずしさと透明感を伴ってきらりと光る、あの輝きを永遠化したいと創り上げたのがグレイズです。先ほどのグレイズ同様、釉薬という意味であり、直球のネーミングですが、釉薬の本道を創り出したとい



【ピラミッド】

う自負を込めています。

また、おっしゃるとおり、重力に逆らい上にあがっているところがポイントです。重力に従い下に垂れるのが常識ですが、それに逆らってこそその生命体です。釉薬の粉体を熱し温度が上がると流れますが、その前に一度凝集が見られます。凝集の力はすさまじく、やり方によってはジャンプさせることもできる。そういう凝集力を利用して上に盛り上げています。凝集するタイミングで同時にガラス化させる必要があり、緻密な調合や温度調節が欠かせません。

—これまで作品を海外で多く出展されて、また数々の著名な賞を受賞されてきております。先生が海外へ目を向けられるきっかけがあったのでしょうか。また現代美術に対する評価、あるいは物づくりなどで海外と日本の間で相違点など、先生が感じられているものがあればお聞かせください。

きっかけは、1989年のベルリンの壁崩壊と1991年に起きたソ連邦崩壊です。大きな衝撃を受けました。東側の国々が西側の世界に入ってきて、地球規模の大競争時代がはじまると盛んに言われた時代でした。いくら日本の中でトップであっても、最終的に世界と競うことになる。だから世界に通用しなければどうにもならないと強く認識しました。実際に、中国大陸や欧米を視察すると、国内では独自だと思われる技術が現地では当たり前のもので存在していたりする。当時痛感した世界に通じることの重要性は、今でも自分の基軸になっています。

欧米と中国を中心に作品を発表するようになったのは2004年頃からです。現地に出かけては、盛んに情報収集も行いました。結果、現代美術についての評価や作品づくりにおいて、主にアメリカや中国と、日本との間には大きな違いがあることが分かりました。日本は歴史が長く、古き良きものが大切にされ残っている。ところがアメリカは歴史が浅い。中国は文化大革命によって古き良きものが破壊されてしまった。だから伝統のしがらみがない。こういう状況が積極的に現代美術を発展させようという動向につながっている。しかし、日本にはその必要がない。この違いは大きいものがあります。



【上海美術館外観】

—古き良きというのは、芸術においても日本の伝統工芸のようなスタイルになってしまうということでしょうか。

過去のすばらしいものが多く存在する状況では、新たなものは特段必要とされない。これは蓄積があるからこそ起きる問題だから、恵まれているともいうことができる。一方、あまり歴史や伝統がない国々は、新たなものを創り出すしかない。やはり、ないからこそ新たに生まれるという流れはあると思います。

—そういった中でも多くの賞を受賞されるのは、容易なことではないと思います。異例なことですかね。

そうですね。特に中国においては陶磁器の本場という強い意識があるなかで、日本人が賞を取ることは並大抵なことではありませんでした。数え切れないほどの苦労も経験しましたが、幸いなことに何度か賞をいただくことができました。

2010年には景德鎮で日本人として初めてとなる個展を開催しました。中国で生まれた技術を進化発展させた私の作品は、新たな歴史を切り拓く仕事だと高く評価されました。今はもう時間が経ったので少し薄れているかもしれませんが、当時最も有名な日本人陶芸家でした。また、同年は上海万博が開かれた年ですが、中国二大美術館のひとつである国立の上海美術館において、外国人陶芸家として初めてとなる個展を開催しました。5日間と短い会期でしたが、万博期間中ということもあり世界中から1万人以上の来場がありました。日本人として新たな歴史を築けたことは、賞をいただいたことよりも大きな成果だと思っています。

—2011年に深紅釉「希赤（きせき）」を完成されております。私自身も陶磁器の色を扱っていますので非常に興味深く、そしてこれが簡単なことではないなということが分かりますので、完成に至るまでに相当な苦労があったんじゃないかと思えます。当時のエピソードなど聞かせていただけたらと思います。

科学の使命とは、一言でいえば、分からないことを解明し、ないものを創り出すことです。だから、過去に既に存在するものを改めて再現しても、原則評価はされない。こういう視点で釉薬の世界も眺めました。諸説ありますが、釉薬は古代エジプトに起源をもち、7000年以上の歴史があるとされる。これだけ長い歴史がありながら、基本色であり、色の王者でもある赤には、誰が見ても真っ赤で透明に輝くものは存在しないとわかった。調べてみると、そのような赤は歴史的に実現不可能とされ、それが常識として定着していました。

こういう現実に直面すると、普通の人はあきらめるという判断をすると思う。おそらくそのほうが賢明でしょう。しかし私の場合は、不可能という現実を疑い、それならば実現してやろうと思ってしまいました。科学者としての血が騒ぐという聞こえがいいが、無謀なだけかもしれません。それでも取り組もうと決意したのが1986年、30歳の頃です。

実際研究を始めてみると、当然のことながら、苦勞の連続が待っていました。可能な限り時間を確保するために、睡眠を削ることはもちろん、極力外出を避けアトリエにこもる生活を続けました。趣味はありませんし、食事は一日一食。50歳になるまでは晩酌をしたこともありません。世界中からありとあらゆる原材料を買い集めるために、私財の大半を投じました。研究の内実は、頭で理論的に組み立てるといっても、結局は実際にどれだけ多くのテストをこなすかに行き着きます。考え得るすべての組み合わせをしらみつぶしに確かめ、可能性を探るほかありません。自分で弁柄を焼くことも、フリットを製造することも行いながら、連日テストピースを焼成し続ける日々が続きました。

当初はマスクもしない、換気もしない環境で連日実験を続けていました。そんな悪習が災いして、突然急性の気管支ぜんそくを発症してしまい、車いす生活を余儀なくされました。2005年の秋から冬にかけてです。階段を2、3段上るだけで呼吸困難になり一向に前に進めないようなありさまでした。幸いなことにいいお医者さんに巡り合い、元通り仕事ができるほどに回復しましたが、死ぬかもしれないとおびえる時期がしばらく続きました。今でこそ実験環境は整えていますが、まだ吸入薬が欠かせませんし、後遺症もあります。

このような紆余曲折を経て、研究開始から26年目にあたる2011年3月11日の朝のことです。炉を開けたら、あっと驚く真っ赤なものができあがっていました。本当にうれしかったですね。セレンディピティという言葉がありますが、やり尽くした挙句の偶然が最後の決め手となりました。あの達成感は忘れられません。



【調合室】



【希赤 光揮】

ところが、喜びも束の間、当日の午後に東日本大震災が発生しました。原発事故の問題もあり、当時は非常に暗い日々が続きました。せっかくの赤が完成したものの、しばらくは作品を作る気持ちにさえなれませんでした。しかし、偶然とはいえ、大震災の当日に完成したという事実を改めて見つめた時、この赤には日本を明るくする使命があるのだと思い至りました。「希赤（きせき）」という名前には、日本に希望をもたらす赤であれという願いを込めています。

初めて希赤を使った作品を発表したのは、6月になってからのことです。まだ混乱収まらぬ状況での発表でしたが、反響の大きさには驚くものがありました。作品の前で、涙を流す方が何人もいたのです。そしてさらに驚いたのは、第一作目をコレクションしてくださったのが、福島県浪江町出身の方だったことです。作品を通じて想いが伝わった瞬間でした。

—こうした作品づくりのお話なんですけれども、先生はどういった環境、場面で作品のイメージネーションみたいなものが湧いてくるのでしょうか。

とにかく何かに執着をし続けていると、ある時自然に湧いてくるという感覚です。たとえば、私は赤の色に敏感で、さまざまな色の中でも、赤が最初に目に飛び込んできます。あるとき、アトリエの裏にある竹林を眺めていたら、暗闇の部分が次第に赤くなり、最後は真っ赤で巨大な広がりとなって、襲われたことがあります。あのときは自分のことながら恐ろしくなりました。このような体験は数多くあります。また、寝ている時に、形や色が鮮明に浮かんでくることがあります。それを夢の中であれこれ操作しているうちに、明確なイメージとして完成し、作品のヒントになったりする。もうひとつは妄想です。たとえば美しい景色を見た時に、富士山でも桜でもいいのですが、感動しますよね。しかし、私の場合、感動の次の瞬間に妄想がやってきます。富士山がすべて黄金でできていたらどんなに素晴らしいだろう、富士山全体が宝石で形作られていたら、オーロラで覆われていたらと空想がどんどん広がっていきます。作品は、自然にはあり得ないことを想像し、現実化したものでもあるのです。

—何かに描き起こすのではなくてずっと頭の中で？

可能な限り、紙に記録しています。現在も60ポケットのクリアファイルが月1冊ずつは増えています。何十年と続けているので、書きためたものは厩大にあります。デッサンやテキストもあれば、研究のレシピやテスト結果、制作の反省などもあり、それらが混在しています。私のインスピレーション日記みたいなものです。それをたどることで、自分の思考を思い出し、創作に生かしています。

—ずっと考え続けるというのはとてもエネルギーが必要ですよ。

そうですね。確かに多くのエネルギーを必要とします。し

かし、考える楽しさが勝ちますね。そして、やはり何としても成し遂げるんだという気持ちが最も重要だと思います。何年も何十年も、同じ気持ちを持ち続けられるかどうかにかかっている気がします。どうしても諦めきれない。執着、執念ですね。

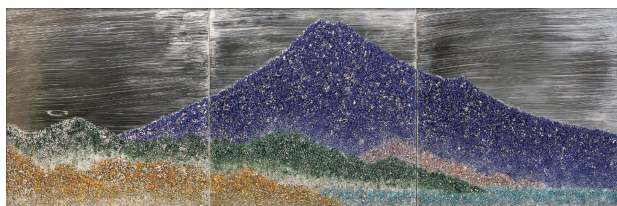
—先生が現在取り組んでいること、また今後目指すものを教えてください。

私の目指す根本的なゴールは人類の永続です。今という時代は人類の存続を脅かす危機があらゆるところで噴出している時代です。こういう時代において、自分の知見と作品をもって人類の永続という究極の目標にいかに関与できるか、それを日々考え発信しています。ただ、現在の発信力のままではそれほど広く世界には伝わらないというのも事実です。現代美術の世界で、本当の意味で世界に通じる作品を制作し、国際的に大きく認められることによって前に進めたいと思います。そのためには日本の中だけではなく、世界の二大大国であるアメリカと中国を中心に盛んに活動をしていく予定です。

—世界に通じるものを作るために何かお考えがあるのでしょうか。

世界に通じるというのは人類に通じるということです。人類の永続を願うという悲壮的な感じにも聞こえるかもしれませんが、私は科学と芸術の両方の力を総動員すれば、人類はさまざまな危機を乗り越え、前に進めるはずだと考えています。アートの意味するところがなかなか世の中の人に伝わっていないと感じていますが、アートは、アーティフィシャルと同様で、語源からすれば人工的、人の為すことという意味です。自然には存在しない、できないことを、人間の力を駆使して創り出す行為がアートの基本だといえる。たとえば、エベレストにしかない鉱物と富士山にしかない鉱物は、自然にはまず結びつかない。しかし、人間が介在すれば結びつけることができる。世界中のさまざまな原材料を集め、化学変化を起こし新たな化合物を作る。私は化学変化に非常に大きな可能性を感じています。まさしくセラミックスの世界というのは日々新たな化学変化を起こし、新たな素材が生まれている世界ですね。しかも、焼くだけがセラミックスではない。もしかしたら海で養殖したセラミックスも出てくるかもしれない。進化を信じられることはとても重要です。

私は3つのキーワードを掲げ、活動しています。「元氣」、



【永遠なる閃光】

「輝き」、「超越」です。これらは、すべての人類にとってなくてはならないことです。まず、元氣は、コロナ禍で誰もが再認識させられたことですが、人間にとって最も重要なことだととらえています。元風（がんぷう）という自分の名前は、世の中に元氣の風を吹かせたいとの思いで自身で名付けたものです。先ほども申し上げたように、仕事とは人を元氣にするためにある。では、自分の場合、いかにして人を元氣にさせられるか。長く考えた結果たどりついた答えが、輝きでした。太陽光や満天の星空などの自然現象から、宝石や貴金属などの人為的な産物まで、世の中には多種多様な輝きが存在します。そうした輝きに触れると人は元氣が湧くことを発見したのです。それ以来、元氣の源である輝きをいかに生み出すかが私の使命となりました。無論、今までにない輝きを生み出してこそ、人類に新たな貢献ができるわけですが、そのために欠かせないのが超越です。先人たちに感謝や敬意を捧げながらも、過去を克服し超えていくことが、今に生きる我々の使命ではないでしょうか。超越のためには、これまで全く試されていない材料同士を組み合わせたり、誰も考え及ばなかった方法で素材を作ったりする必要があります。たとえば、顔料はさまざまな雰囲気なかで作られているが、フリットはそうではない。窒素雰囲気や真空状態で作るとどうなるのか。顔料の業界に比べてフリットの業界は小さいからでしょうか、まだやられていないことがたくさんある。私の考えが及ぶ分野だけでもいくらかでも可能性があるのだから、科学全体ではそれこそ歴大な可能性があるはずですが、人類はまだ進化が可能で、簡単にあきらめてはいけません。

—最後にこれから陶磁器、セラミックスに携わっていく若手の方々から先生からメッセージをいただけますでしょうか。

セラミックスは、数多くの機能を持った物質としても、またさまざまな美しさを持った素材としても、無限の可能性があると思います。

昨今、AIが持てはやされていますが、アウトプットされた情報の中での組み合わせでしかない。一方、言語化されていない情報を豊富に持っているのが研究者です。人間の中にしかない豊かな知見を大切にしてほしいと思います。

私は現在67歳ですが、105歳まで現役で活動すると宣言しています。あと38年あります。研究も創作も、一朝一夕になるものではありません。長生きしなければ成し遂げないことも数多くあります。だから、まずは健康に気をつけて、少しでも長生きをすることが肝要です。決してマスクや換気をせずに調合をしてはいけません（笑）。若手の方々には、FIREなどに惑わされず、ぜひ長期的な視野をもって頑張ってくださいと思います。

—本日は、お忙しい中、誠にありがとうございました。

（2023年5月18日
インタビュアー：濱崎喜仁（協会誌編集委員））